一　待ってる。　7
二　図書室　21
三　ビブリオバトル　29
四　入部してしまった。　42
五　脳の引き出し　50
六　空気が違う。　58
七　誰なの？　72
八　真面目？　77
九　どこへ行きたい？　86
十　まさか……？　93
十一　悪いの？　103
十二　選べる名前　119
十三　失恋　128
十四　わたしの話を始めよう。　152

単位で残り時間が知らされていく仕組みだった。残り時間が６０秒になるとその数字の色が赤になり、タイムオーバーで、カカカカンと鐘が鳴る。

「では、ディスカッションタイムに入ります」

「はいっ」

高見先輩が、すかさず手を挙げた。

「実はこの映画、観てないんですが、映画を先に観たらいいですか？　それとも、先にこの本を読んだらいいでしょうか」

さっきうなずいてたのは、「観た」という意味ではなかったのか。

「おお、あの映画を観てない人、初めて会いました。貴重です。では、よかったら先に本を読んで、それから映画を観てください。

ぼくも友人達も、みんな映画を観てから本を読んでるので、逆パターンの感想を知りたいです」

あくまで自分の興味ってわけね？

「はい」

今度は先生が手を挙げた。

「日本のアニメ技術はすごいです。音成君は、どういうアニメを作りたいんですか？」

駆け寄って、「何かあったんですか？」と言いかけ、やめた。わたしに用事があるから来たとわかりきってる。

「よかったら読んで」

大きな茶封筒を差し出してくる。

「これ……」

たぶん、中身は原稿だ。

イリーナ先輩は、短歌を中心に創作している人。これは、短歌なんだろうか。

受けとった封筒は、髪パッチンの小説『妖精パメラの恋』よりも軽かった。すぐに中を見たいけど……。

「文芸部に入って、初めて書いたものなの。

高見はすごくほめてくれた。

でも、『これは、エッセイなのかなあ。いや、短編小説かなあ』ともつぶやかれた。

どっちなのか、わたしにもわからない。でも、なぜわたしが文芸部に入ったのかは、これを読んでくれたらわかると思う。これを書くのにはものすごくエネルギーを使ったの。そのせいか、あとは長い文章を書く気力がなくてね……。

これを読んでもらったほうが、ちゃんと伝わるかなと思って」